

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

吹奏楽部で学んだこと

京都府立洛北高等学校附属中学校 2年 志茂 和香

「起立。礼。お願いします。」

「お願いします。」

いつもの様に、部長に続けて挨拶をして、席に着く。元気にしたつものの挨拶も少し声が小さくなった。また注意されるのだろうか。そう思うと、お腹がキリキリと痛み出す。

吹奏楽部に入った私は、バスクラリネットというかなりマイナーな楽器を担当することになった。はじめは大きくて、黒と銀の2色がなんてかっこいいんだろうと思っていた。すごく嬉しくて、早く上手くなりたかった。基礎練習でも何でも頑張った。入って1ヶ月コンクール用の楽譜を渡された。ワクワクしながら、楽器を構え、息を吹き込む。一通り吹き終わると、私は落胆を隠せなかった。まるやかな低音でどんなメロディーを吹けるのか楽しみだった。でもその譜面は、クラリネットのようなキラキラしたメロディーではなく、良く言えばバンドの土台、悪く言えば地味なものだった。

コンクールに向けて本格的に練習がはじまり、みんな一生懸命に楽器を吹いていた。しかし私は未だに譜面の中身がショックで、しっかりしようと思う反面、そこまでがんばらなくても大丈夫だろうと思って中途半端に吹いてしまっていた。そして中途半端に吹いていたせいで、ある合奏の日、顧問の先生に、

「志茂。音が汚い。もう1回。」

と言われてしまった。その後も何回も怒られ、以前は楽しかった合奏が全く楽しくなくなった。私は確かに下手くそかもしれない。でもそこまで言われなければいけないのかと帰宅してから怒りと悔しさがこみ上げてきて涙がこぼれた。どうしても怒りが収まらなくて、祖母にうち明けた。すると祖母は、

「1人で何回も吹くんは嫌やったな。でもあんたがもっと練習して上手くなったらもう怒られることは無いんちゃう？悔しいからそんなに怒ってるんやないの？目立てへんくても上手くなって『バスクラリネットが上手い子』として目立てばええねん。あんたならできる。」と言った。私はハッとした。と同時に今まで中途半端にやっていたことがとても恥ずかしくなった。大切なことを教えてもらったのに、「ありがとう」が言えなくて、すごく申し訳なかった。

次の日から私は時間を惜しむ様に練習に取り組んだ。いつもは持て余し気味だった個人練習の時間が足りなくなってしまう。そしてその次の回の合奏。また「志茂。」と呼ばれ何か言われるのではないかと怖がっていると、

「先週よりすごく上手くなったな。びっくりした。」

とニコッと笑いながらおっしゃった。何とも言えない気持ちがこみ上げてきて、胸がポカポカした。その時、努力は報われるんだなと感じた。もっと上手になりたい。そう久しぶりに思えた。そこからは楽譜を読みこんで、どう吹けばいいか1日中考えたりもした。そうしてどんどん日々が過ぎて行き、前日になった。その時、先輩から、

「色々大変だったろうけど、和香がこうして目立ってなくても支えてくれるから私達が吹けてるんやで。ありがとう。」

と言われた。私は自分自身が目立てなくても、支えることによって誰かが目立てるなら、この楽器で、この譜面を吹けたのも幸せだと思えた。

あれから1年。今年もコンクールに向けて練習している。今回も私の譜面はリズムが多い。友達に、「あんなに目立たない楽器なんでずっとしてるの？嫌じゃない？」と悪気無く言われたこともあった。以前の私なら、嫌だな、なんでこんな楽器にしたのか分からない、と言ったと思う。でも今なら自信を持って、「目立つことだけがカッコいいんじゃない。目立たなくても、この楽器が大好きだからしてるんだ。」と言える。考えの他にも行動面も少し変わった。例えば、落ちていたゴミ。今までは別に誰かが見ている訳じゃない、と放つたらかしだった。でも今は誰かが見えていなくても役に立ちたい、と拾えるようになった。これからは、もっと目立つ目立たないに関係なく、社会などを支える人間になりたい。

そう思わせてくれたこの楽器が、先輩が、家族が、部活が。私は大好きだ。